

〔連載〕武蔵御嶽神社宝物シリーズ 30
「橘千蔭筆『御嶽山』社号額」

日本風俗史学会 会員 齋藤 慎一
前青梅市文化財保護審議会会長

武蔵御嶽神社の社号は、江戸時代初期には、明暦二年（二六五六）五月二日の社奉行への訴状に「武州御嶽金峯山蔵王権現」、更に古い天正一九年（一五九二）十一月の徳川家康の署名入（御判物）の寄進状には「御嶽権現」とあります。

江戸時代後期、幕府の命令で武蔵国全体



社号額「御嶽山」筆 橘千蔭



(裏面)

の地誌「新編武蔵国風土記稿」が編集されます。御嶽神社の調査は、文化十二年（二八一五）四月、「風土記稿」には、正門の仁王門（現在随神門）に「東国社稷総社 御嶽山」、二の鳥居には「武蔵国号社」の額があったと記録します。しかし五十三年後、多分明治維新の折に取り外され、仁王門の分のみ宝物殿に現存します。

額は、江戸の浅草橋場町の講中からの寄進で、文字を書いたのは町奉行所与力の加藤又左衛門橘千蔭（一七三五～一八〇八）でした。千蔭は、国学者加茂真淵の門人で、有名な本居宣長とは同門であった国学者です。（後述）写真をご覧ください。框目の総枠木造りで、縁は平安風の花尖形で白木の生地を生かし、木口と匡郭と文字にのみ墨をさします。神社らしく古雅で簡素、清々しい意匠です。寸法は、全体で縦120cm余、横76.5cmで、文字面は58.5cm x 106cmです。三行にわけて冠称にした

「東国社稷総社」は、関東の土地と穀物のすべてを守護するお山」という堂々とした社号です。社稷には国家の意味もあって重みがあります。また、御嶽が農業神として古く信仰されてきた神格をも表現し得ています。初期の社号が仏教的で祭神を中心としたものに対して、当時の祭神の大神主神（大物主神）、少彦名神、廣國押武金日命（蔵王権現）など「記紀」のいう国土経営の神徳の表現です。

十五年ほど年代は下りますが、天保二年（一八三一）十月刊の一枚刷「御嶽山略縁起」（青梅恩田家文書）ではこの二つの社号を、表題の「御嶽山略縁起」の上に「御嶽國号社」と「東国社稷総社」を並べて二行に角書としています。

この縁起書は一般向けですが、「延喜式」や「日本書紀」・「古事記」・「万葉集」など日本の古典、本居宣長の「玉鐔百首」を引用して、当時盛んであった「国学」系統の作文です。前号の「太々神楽」で紹介した、御嶽山へ文化十年代から訪れていた秩父の神職で国学者の齋藤義彦の執筆と推定される国学の考え方で縁起書です。

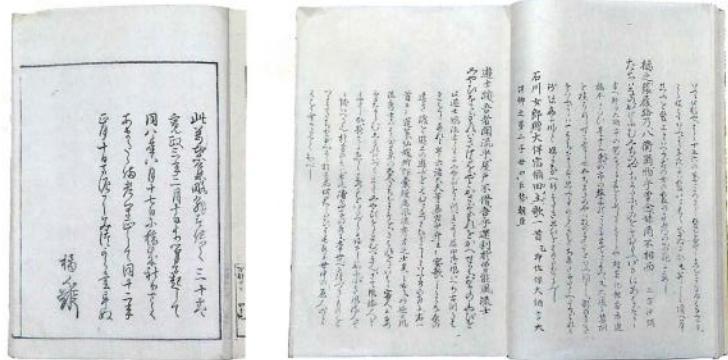
一方、この神号の起点的背景は、享保十二年（一七二七）の八代將軍吉宗の御嶽神宝上覧だと思えます。八代將軍吉宗は、保存の指示を社奉行から奉書で伝え、神宝に対して「武蔵国之宝器」という評価を神主に伝えていきます。その將軍の権威を背景にして御嶽側での神威高揚のための解釈があったようです。寛延二年（一七四九）正月、神主の浅羽藏人の宝物収納の宝蔵建造出願に関わると推定される「武州御嶽山起立覚」には、「為社稷守護之蔵王権現

一國一社」「東国社稷之総社」御座候」とある社号が目立ちます。三度目の十代家治將軍の上覧にあたっての答申書には、吉宗の発言と共に、「武蔵国号社」の社号に近いものが使われています。やがて、御嶽神社の神威を示す社号として定着、文化二年頃までには、正門の仁王門や二の鳥居に高く公称として掲げられるに至るのです。時代の権威や学問の深化を背景としての神社の存在感の明示です。

さて額の裏面には、釘を打ちはじめんだ横棧が外れた跡があります。針金を付けて仁王門に掲げるための棧でしょう。表と柿渋塗の裏にそれほど風化の跡が無いのは、短期間の掲示であった証拠です。

裏面には、「文化二年歳次乙丑（一八〇四）種（秋）閏八月二十有八日」橘千蔭書」とやや上部に三行に彫字、下部の行間、中央に「當山大宮司 大仲臣朝臣 郡枝」、その右側に「江府（江戸）御使者狗講中 世話人 橋場町代参講中、左に「願主當山奏者 柴崎信濃正藤原郡光」と楷書で二行に彫りつけます。

文化二年八月二十八日に、「千蔭流」の書道家でもあった橘千蔭が筆をとり、世話人は、江戸の御狗講中の橋場町（浅草の隅田川沿いの町。現在台東区と荒川区。千蔭の別荘の石浜庵があった）代参講です。願主は、講の先達の柴崎信濃正藤原郡光です。奏者とは、講のリーダーでしょう。御嶽神主の金井勇助政国の養子で江戸から来た大輔郡胤は、この橋場町にあった橋場神明宮の神主鈴木兵部二男です。鈴木家も年頭に江戸城へ登城し、御嶽神主家と同格です。父の鈴木兵部は、安永九年



「万葉集略解」筆写本 二巻の本文
「万葉集略解」二十巻の跋

（二七八）十一月、二の鳥居を御嶽に寄進、この額と対になる「武蔵国号神社」の額を掲げました。郡胤は、実父や兄兵庫と共に「大宮司大仲臣郡胤」と刻まれていきます。橋場町の講の人々には、なつかしい鳥居だったでしょう。仁王門の額の裏面の「大宮司大仲臣朝臣郡枝」はこの郡胤の孫で、名乗り方が似ていて、継続した企画とも感じられます。しかし、金井家文書、また金井家の講にも、江戸浅草橋場町の講は見当たりません。そして筆者の橘千蔭ですが、これは捕物帖など時代劇でおなじみの北町奉行配下寄力の二十五騎の一人で、吟味役（公私の訴訟、裁判、処刑に関わる）とい

う重職にあった人です。同じ八丁堀の同心五十人はその配下です。奉行所では、奉行の側近 調査担当です。江戸天下祭の折は、麻袴姿で、騎馬の与力五騎が祭行列の警固として、江戸城の田安門・半蔵門への入城まで付き添っていました。城内へは入らず、城門で御先手寄力へ引き渡すのです。江戸の町人達にとっては身近な武士で「八丁堀の旦那」と呼ばれていました。与力は御家人で、石高二百石、役料三十石と小身ですが、職掌柄、大名方から公式の付け届けは、年三両はあったとか、広い屋敷地を賃地としての収入があり、富裕であったそうです。武士でありながら遊芸や学芸に遊ぶ余裕があり、江戸の文化・文政期の学問や諸芸術の興隆期の一翼を担いました。千蔭の父枝直は、国学者の加茂真淵の友人で歌人です。真淵が江戸へ出てきた時には、与力屋敷に佳居を提供し、和歌の交遊をし、十四歳の千蔭を真淵入門させています。千蔭は、以後二三年間、この「近隣」の国学の大家、真淵の膝下にありました。したがって「古事記伝」を著した伊勢の本居宣長とは同門の学友でした。さて、千蔭が入門した頃の真淵の歌風は、古今調でしたから、千蔭も古今調となりました。その後、真淵は万葉集を研究し「万葉集考」という註釈書を著します。千蔭もその研究作業に関わり、万葉集への知見を深めました。千蔭は研究者というより、国学の中心となる万葉集の大切さ、魅力をどうかして多くの人に理解し、楽しんでほしいという歌人としての考え方で註釈書「万葉集略解」を著し、二十巻三十冊を刊行します。千蔭の考えは当たり、以来明治に到

るまで、万葉集の註釈書として最も多く刊行されました。千蔭の三人の学友も協力し、殊に本居宣長は、千蔭の問題提起にひとつひとつ至るまで、万葉集の註釈書として最も多く刊行された「註釈・学説」部分は、少し小さな行書の漢字仮名交じりで整然と書き分けています。千蔭は「草書の仮名」の名手とされ、千蔭流」として有名で、多くの人々に使われ三十点近いお手本が、没後も近代まで刊行されました。「略解」の版下書には、千蔭の筆跡へのこだわりを感じます。千蔭は「略解」の跋（あとがき）を、その草書の仮名で書き、「略解」は寛政三年（一七九二）に開始し、「同十二年（一八〇二）正月十日までにみづから書きおはりぬ」とありますので、「略解」の版下書は千蔭の筆によるものともよめます。得意の草書を避けて、読みやすい、楷書と行書です。版下書は千蔭でなければ、千蔭の意になかった筆力を持つ人であったと思います。もう五十年も昔、私はアララギ派の歌人であった叔父 桜木成一から贈られた「万葉集略解」の三十冊揃いを持っています。しかし、一、二冊目の刊本が不足して、筆

写本で補充してあり、それが刊本の筆跡と類似して、伝橘千蔭筆写本といわれました。二冊目の橘千蔭の、二つの雅名「橘千蔭」・「橘八衛」のもとになった和歌の部分と刊本の跋の部分をお目に掛けます。御嶽山の社号額も、草書の仮名の名手の千蔭の作品としては、楷書体と行書の漢字であるのもめずらしい。神社の額を揮毫の例もありません。制作年代がわかるのも貴重です。しかも町内の講中のための揮毫です。「万葉集略解」著作の発想と同じような千蔭の人柄を想像させるものがあります。国学者との縁の多い御嶽山に、国学の主流にあった加茂真淵や本居宣長と深く交流し、その都会性故に江戸派と称された橘千蔭の名筆が社号額として庶民的な浅草の講を仲介として今に存在していることに感慨を覚えます。なお、青梅の文人で御嶽山へも何度も訪れた黒田庄左衛門（山田早苗）は、「玉川派源日記」の中で、前出の「御嶽山略縁起」を「日本書紀」「古事記」「延喜式」を引用し、文献批判（考証）しています。また、「永久田家務本伝」で千蔭の「万葉集略解」から、本文の頁数（丁附）まで付けて引用しています。

【主な参考文献】
「日本古典文学大辞典」（岩波書店）
「町奉行与力の風流な生活」（昭和女子大学 光葉博物館図録二〇一一年）
「原胤旧蔵資料調査報告書」（千代田区 教委 二〇〇八～二〇一一年）
「時代風俗考証事典」（林美一 河出書房 新社一九七七年）